

# あなたに伝えたい

85歳の今も舞台上で歌い続ける岡村喬生さん。生涯をかけて成し遂げたいと願う、ある使命とは？

## 蝶々夫人はとても偉大な作品。 だからこそ間違いは正すべきです。

岡村喬生さん おかむら・たかお オペラ歌手

歌手活動のみならず、演出など幅広く活躍し、ヨーロッパと日本の音楽交流にも尽力。現在、「NPOみんなのオペラの芸術監督を務める。



岡村喬生さんと歌の世界との出会いは大学時代、グリーククラブ(男声合唱団)に誘われたことから。1959年にイタリア政府初の給費音楽留学生としてイタリアへ渡り、翌年、国際コンクールで優勝。いくつもの歌劇場で専属歌手を務めるなど活躍した。20年の欧州生活を経て帰国し、日本のバス・バリトン歌手の第一人者として舞台に立ちながらオペラの普及活動にも力を注ぐ。今も現役の歌手だ。「最近では少しインタビューを避けながらですが、コンサートは定期的にやっていますよ。歌声は変わらない自信があります」と。とくに、シューベルトの歌曲



「出前コンサート」も、岡村さんが続けている活動のひとつ。身近な会場で、誰もが知っているような名曲をトークとともに楽しめる。チケット代金は2,000円!

### 岡村さんが歌う、名曲を身近に楽しめるコンサート。

「冬の旅」は、1960年にフランスのトゥールーズ国際音楽コンクールで歌ったから、実に57年間も歌い続けているライフワークで、曲への思い入れもひとしおだ。「恋人に裏切られた若者が、あてもない旅に出る冬の情景を歌った切ない曲です。シューベルトのような先人がつくった素晴らしい歌は、人類みんなの財産。ずっと歌い続けたいですね」西洋の文化であるオペラやクラシック音楽に深く敬意を表しながらも、長くヨーロッパで活動してきた岡村さんには、ずっと気になっていたことがあった。それは、イタリアを代表する作曲家プッチーニのオペラ『蝶々夫人』に登場

### 創立70周年の年に、群馬交響楽団とコラボした。



映像作品『蝶々さん群馬にはばたく』の1シーン、群馬交響楽団による移動音楽教室の様子。岡村さんの凱旋公演での群響とのコラボレーションも描かれた。

する日本文化が、あまりに誤解されたものであるということ。たとえば、主人公・蝶々の伯父ボンゾー(坊主のこと?)は、僧侶なのに鳥居を掲げていたり、姪の蝶々のところに怒鳴り込んでくるときに「蝶々さん」と「さん」付けする。また、おそろく「猿田彦神」という意味で、「かみさるんだしーこー」と叫ぶ。ほかにも意味不明のおかしな台詞や所作が

何か所もあり、現代でもそのまま演じられているのだ。

「向こう(イタリア)の人にしてみれば些細なことなのかもしれないが、日本人からすれば、侮蔑ともとれるくらいの誤解です」

岡村さんはボンゾーを演じることも多かったが、滑稽な姿を受け入れ、台本どおりに歌うのはひどくつらいことだった。

いつしか、それらの間違いを訂正することは岡村さんの悲願とな

### イタリアでも話題を呼んだ、岡村さん演出の『蝶々夫人』。



「プッチーニフェスティバル」で上演された岡村さん演出の『蝶々夫人』。東京からイタリアまで密着し、この挑戦の軌跡を追ったドキュメンタリーも見応えあり。

り、2011年に本場イタリアで岡村さん演出による『蝶々夫人』を上演。現地でプッチーニの孫娘に拒否され、台本の改訂はできなかったものの、公演自体は大成し、岡村さんの試みは少なからず話題になった。

このイタリア公演までの道のりが、『プッチーニに挑む 岡村喬生のオペラ人生』というドキュメンタリー映画に。今年の7月9日には、本作を含む3本の映像作品の上映会が、東京・日比谷コンベンションホールで開催される(開催ドラ ☎ 03・3555・3987)。岡村さんの歌とオペラにかける熱量が映像から十分に伝わるはずだ。「『蝶々夫人』の完全台本改訂は、いつか実現したいのです。日本人も、かつては積極的に自分たちの文化を発信してこなかった側面があります。おかしなものはおかしいと主張して、理解してもらおう努力をしないとけませんよ」